

「NEC 田んぼ作りPj」 とは何か！？

2007年6月26日
NEC CSR推進本部
環境推進部

なぜ、IT企業が「田んぼ」なのか？

大目的： 全従業員の環境意識の啓発

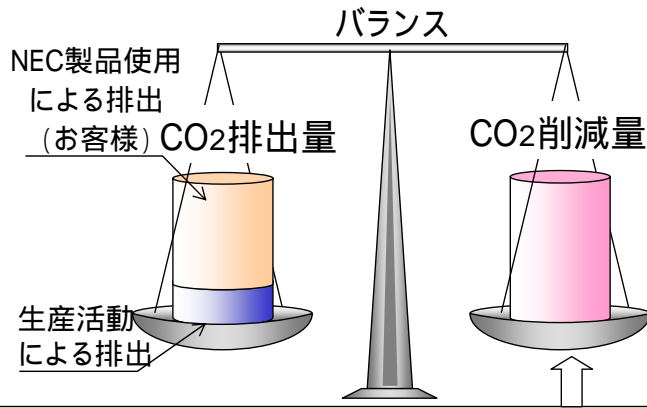
“田んぼ”

自然を直接実感
人と環境の関わり合いを体験



持続可能な企業体への変革の基盤作り
文化・風土、価値観など
企業の**全集合意識の変革**

NEC環境経営ビジョン2010



2010年度における
CO₂排出“実質ゼロ”

ITソリューションの提供を通じて、お客様、社会でのCO₂排出量を削減

低環境負荷の「持続可能な事業構造」の実現

省エネ化による製品のCO₂削減貢献率50% (2005年度比)

資源生産性(売上高/資源投入量)を2倍(2000年度比)

事業活動における

地球温暖化効果ガス(含:CO₂)の総排出量を基準年レベルへ削減

再生可能な資源・エネルギーを10%以上導入

全社員が高環境意識層(エコ・エクセレンス)へ

【事業推進における環境意識の啓発】

持続可能な事業経営(環境経営)の促進

全社員をエコ・エクセレンスに！

2010年度

(2007年度:60%)

企業人(組織)
として

- 日常業務に直結した環境教育
 - ・環境経営の概要(研究・開発、生産、営業、スタッフ)
- 事業ラインごとのキーマン対象教育
 - ・環境経営の基本的な「考え方」を修得
- 職種ごとの環境専門教育
 - ・エコデザイン:DiE、LCA、
 - ・グリーン調達、
 - ・3R対応、
 - ・環境監査専門家教育、など

個人(生活者)
として

- 自然体験参加型環境教育
 - ・NEC田んぼ作りPj、ピーチクリーンPj
 - ・植林エコツアー、
 - ・里山保全、など
- 社外への環境教育支援とも連動
- 環境意識啓発のための講演会
- 社員家族を巻き込んだ意識啓発
- ・グループでの環境家計簿の展開

環境経営推進の必須要件

バランス

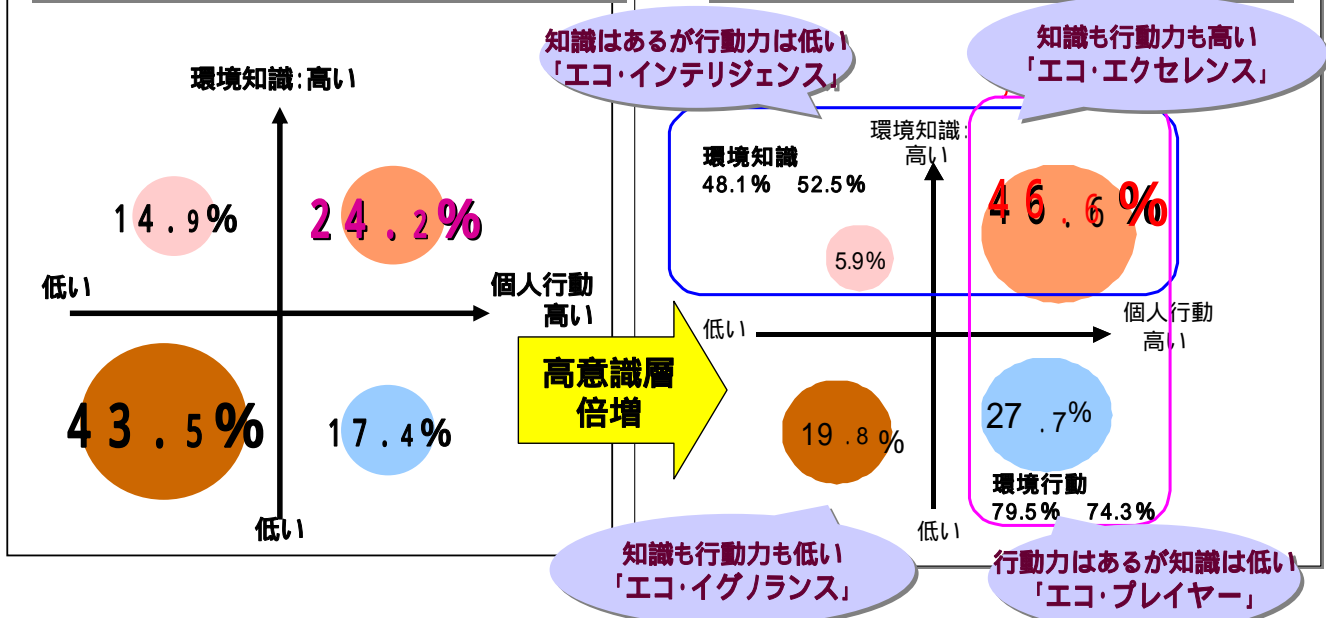
「人」の基本として

【2006年度NECグループ環境経営意識調査】

回答総数: 11,292名 **3.5倍** → 回答総数: 40,479名

2003年度実施 第3回調査結果

2006年度実施 第6回調査結果



なぜ、NPO(アササ'基金)との協業か？

企業: 事業ノウハウ/高いマネジメント機能

+

NPO: 個別領域における高い専門性

||

相乗効果: 新しい社会的付加価値の創出

【NEC 田んぼ作りPjのねらい】

「三位一体」効果を
意図した活動

事業革新

- ・新しい技術開発
- ・新ビジネスモデル提案



愛知万博の会場に
設置された「万博アメダス」

NEC 田んぼ作りPj

地域貢献

- ・地域社会との
信頼関係の構築



社員の 意識改革



「NEC 田んぼ作りPj」の活動の概要

自然との関わりの中で、
人本来の感性復活と環境への意識昂揚を促進

NECの田んぼ作りPj - withアサザ基金 - の展開

NPO・アサザ基金主体の霞ヶ浦流域・谷津田 再生事業に参画



NECブランドの日本酒

【活動内容】

- ・復田作業： 約4反(約4000m²)を再生し、酒米を育成
- ・年間を通じた自然体験型の意識啓発活動を企画・実施



(アサザの花)

年間の主な行事予定	
4~5月	復田作業
5月	田植え
7月	草刈り、アサザお花見
10月	稲刈り
11月	酒仕込み(白菊酒造に委託)
3月	新酒の蔵出し



(復田前の状況)



(復田後の収穫時)

ネットワークセンサーのテストフィールドにも活用

社内ネットで現地再生状況を定期的に発信



“NEC田んぼ”の場所

所在地：茨城県石岡市

広さ：水田を含めて約4.5反歩(約4,400平方メートル)



北ノ入谷津：

石岡市中心市街地から東南約2.5kmに位置し、北北東-南南西に延びる谷で、東田中地内で山王川(山王川都市排水路)注ぐ。合流点より約900m下流で、山王川は霞ヶ浦に注ぐ。北ノ入周辺は山林と農地(水田、畑地)で、市街地に近い場所としては自然環境が良好である。

【活動内容と参加人数】

2004年度 スタッフ含む
:参加総数(674名)

2005年度 スタッフ含む
:参加総数(1000名)

2006年度 スタッフ含む
:参加総数(1100名)

- 田植え: 5月 (130名)
- 草取り: 7月 (140名)
- 稲刈り: 10月 (140名)
- 脱穀: 11月 (70名)
- 井戸掘り: 11月 (130名)
- 酒仕込み: 1月 (140名)
- 新酒蔵出し: 3月 (130名)
- 達人コース: ~ 3月 (220名)

< 達人登録者数 >

32組72名(2007.06.01現在)

2006年度達人コース スタッフ含む
:参加総数(220名)

< 4月~6月 >
種浸け
種まき
くろぬり
代掻き
一の草取り
二の草取り

< 10月~12月 >
オダ準備
大豆収穫
大豆選別
堆肥づくり
わらない

< 7月~9月 >
大豆まき
大豆手入れ
畦草刈
レンゲ播種

< 1月~3月 >
伐採
堆肥の管理
一日蔵人
炭焼き
炭出し

【NEC 田んぼ作り活動における一連の作業風景】



畦作り(4月)



田植え(5月)



草取り(7月)



ユツオ作り(9月)



籾の収穫(11月)



ガーコンによる脱穀(11月)



稲刈り(10月)



オタ棟組み立て(10月)



酒仕込み神事(1月)



洗米体験(1月)



ラベル貼り(3月)



新酒「愛酊で笑呼」
誕生!

【お楽しみのオプションプログラム】



田楽奉納三味線演奏



谷津田自然散策 & 生物調査



川遊び(筏・カヌー)



案山子作り



谷津田の勉強会



オカリナコンサート



無形文化財のお囃子



畑での芋掘り・落花生掘り



きのこ栽培



井戸掘り(上総掘り)



お味噌作り

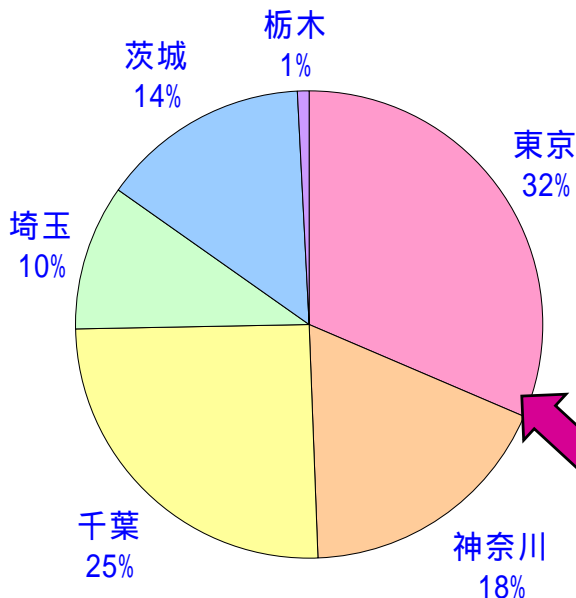


餅つき



【参加者データ】

<住んでいる地域>



<リピーター6割:新規4割>

* 4年間続けて参加のご家族も！

<家族6割:大人のみ4割>

* 0歳～80歳まで

家族三世代で参加！

* 若い女性のグループの参加

* 50歳代の男性単独の参加

半数の方は東京・神奈川にお住まい。
現地まで片道2時間以上！

【なぜ、お酒か？】

一年間の流れ(物語り)ある企画 資源循環型のプログラム

「日本酒」という形ある成果物
人が関わる「モノ作り」の
原点、本質を実感

地場産業(酒造)との連携
地域活性化



NEC 田んぼ作りPjの効果は？

「お米の収穫」

NECブランドの日本酒：

「愛酊で笑呼」(IT、で、エコ)

生態系の再生

広報、宣伝・広告、社外表彰

営業活動

参加者の意識変革

活動自体の社会的拡大

田んぼの再生と生きものたち

2007年4月24日現在

卵塊数	2005年春	2006年春	2007年春
ニホンアカガエル	2	71	423
アズマヒキガエル	1	5	12

田んぼを荒れたままにしておくと、乾いていたり、水気があっても水面がなかったりして、トンボもカエルも卵が産みにくくなっていました。田んぼを再生して最もよこんでいるのが、このトンボやカエルたちです。みなさんも田んぼに来るとたくさんのトンボとカエルに迎えられて、このことを実感されていると思います。

トンボの数を正確に数えるのはなかなか難しいのですが、カエルの卵の数はかなり正確に数えられます。早春に卵を産むアカガエルやヒキガエルは、今はどこでも卵を産む所が少なくなって、たいへんこまっています。やはり、北ノ入田んぼはカエルたちにもよるこばれているようです。(アサザ基金)



ニホンアカガエルの卵塊

【メディアへの掲載、社外表彰実績】

NHK「地球だい好き・環境新時代スペシャル」など
TV放映:7件、ラジオ放送:2件



日本経済新聞、読売新聞、毎日新聞、日経ビジネス など
新聞記事掲載:41件、雑誌掲載:11件

→ 総額:約2.2億円の宣伝・広告効果相当

< 関連本及び映画の出版:4件 >

出版「地域と環境がよみがえる-水田再生-」、家の光協会
映画「広げよう環境びとの和・輪・環」、群像舎



< 社外表彰:2件 >

第3回パートナーシップ大賞「パートナーシップ」受賞(2005年度)
第4回日本環境経営大賞「環境連携賞」受賞(2006年度)

【お酒「愛酏で笑呼」の活用】

< 収穫量 > 玄米:約1300kg

< 醸造量 > 720ml(4合瓶):約2000本相当

< 用途 >

- ・営業活動における活用
 - トップセールス時の進物、お客との交流会など
- ・外部コミュニケーション
 - 経営トップの社外活動:経済同友会、経団連など
 - 社外講演など、社外情報提供時の贈呈品
- ・宣伝・広報活動
 - 経営トップのメディアとの年末懇談会
 - NEC軽井沢72女子プロゴルフ前夜祭
 - NECカップ囲碁トーナメント懇親会
- ・社内行事活用
 - CSRコンベンション懇親会
 - 各種環境関連行事



経済同友会懇親会時の活用

【子ども達からのお絵かき便りや、応募作文】



未来の環境のために今できること

篠崎第二中 一年 阿部

去年と今年に茨城に田植えに行きました。場所は二十年以上も荒れ放題で田植えがされていませんでした。その場所に田おこしを行い、自然の生き物が住める環境にするために、ボランティアの人たちが集まり「田んぼプロジェクト」がスタートしました。初めて田植えをした時は、どろだらけでまっすぐ植えるのむたいへんでした。田植えをしている時にはカエルを見ました。東京では、なかなか見ることができないのでびっくりしました。田んぼと自然環境について少し勉強しました。①水をきれいにする働きがあります。土の層が汚れた水をこし、有害なチッ素を分解して無害にしてくれます。②洪水や土砂のくずれをふせぎます。田んぼは雨水をいったんため、ゆっくり放出するため洪水や土砂くずれをふせぎます。③気温を調節します。水蒸気を発散して、気温が上がるのをおさえます。④地盤沈下をふせぎます。地下水と川の水の量のバランスをとりながら、雨水をゆっくり

【参加者の意識変化～行事後の感想より抜粋～】

<行事の楽しさ> (田植え時)

- ・とても楽しい田植え体験ができました。皆様のご苦労の上に、とても良い体験をさせて頂きました。
- ・子供達の感想も同様で、「楽しかった」、「また来年も田植えやりたい」、「キャンプも行きたい」etc 自然を満喫したようです。
- ・霧ヶ浦の浄化に少しでも役立った。
- ・子供達は、「田植え」や「散策」など楽しかったようです。「次は何時?」って、次が楽しみで、また行きたいようです。
- ・かみさんは、泥パックが良かったみたいで、肌のしっとり感が、ソ織は若返ったようです。次のイベントも楽しみにしています。
- ・イベントがない月でも稲の様子を見に行きたい心境です。

<活動内容への共感> (稲刈り時)

- ・田植えから半年で立派な稲となった成長力にびっくりしました。「自然からの大きな恵み」を感じました。
- ・重労働でしたが、自分の手で植えた小さな稲が豊かに実ってる光景に感激しました。
- ・お米作りの大変さを知り、また感謝の気持ちを持つことができました。子供も生き生きしていました。
- ・田植えの時はあぜからの見学だった下の子も、今回は稲束運びを一生懸命やれるようになりました。
- ・子供は、アニメのトロロでしか見たことなかった井戸や餅つきに興味津々でした。
- ・小さい頃体験した「おだ掛け」や「もみすり」を、子供にも体験させることができ嬉しい。

<環境への実感> (新酒の蔵出し時)

- ・自分たちの活動がどう自然再生に結びついているのかが分かり始めたので、意識がかなり変わった。
- ・「自然からの大きな恵み」を感じ、益々自然が好きになった。環境保全の大切さを痛感した。
- ・これまで美しい風景でしかなかった田んぼを見る目が変わり、道ばたにいる虫や鳥に気を留めるようになった。
- ・季節の変化を気にするようになり、身近な環境問題に関心を持ったようになった。
- ・いつのまにか、自分自身が環境を意識していることに気がつくようになった。

<コミュニケーション>

- ・親子のコミュニケーション: 予想とは裏腹に、たくましく泥にまみれて悪戦苦闘している子どもの姿を見て頼もしく思えた。
- ・参加者同士の交流: お互い1人でイベントに参加していてすっかり仲良しになりました。顔見知りになった仲間たちとイベント以外のボランティアなどに一緒に参加するようになりました。

【NEC 田んぼ作りプロジェクトを通じて】

◆ただ楽しいだけのイベントでは終わらなかった！

参加者の意識は、
<行事の楽しさ> から <活動内容への共感> へ、
そして、<環境保全に対する実感> に変化！

◆様々なコミュニケーションが生まれた！

「所属・肩書きを超えた社員間のコミュニケーション」
「親子のコミュニケーション」
「地域とNECとのコミュニケーション」

◆活動の広がり

損保ジャパンの皆さま、三井物産の皆さまが、
この活動をモデルに谷津田で田んぼ作りを開始！

この活動の今後の可能性

「百年後のトキ自然再生」を目指した活動の継続
自律的活動への転換

企業の福利厚生制度としての展開の模索

「自給自足型サービス」の提供

(例) 従業員対象：企業版市民農園サービス

- ・年間使用料で1家庭に1反の農園を貸与
1反：1家庭/年の基本的食料をほぼ自給できる耕地面積
- ・ボランティア休暇を利用した農作業
- ・従業員が収穫した作物の買い上げ 社員食堂の食材に活用

派生期待効果：セカンドキャリア研修の場、
管理業務、指導業務などの新規企業内雇用開拓

持続可能な社会

= 生命の基本を「自給自足」できる社会

生命の基本：衣食住、教育、医療など「人間の本质」に関わるモノ

【NEC 田んぼ作りプロジェクトからのメッセージ】



朱鷺の舞う湖を夢みて、NEC社員家族は忘れられていた
谷津田をよみがえらせた。
田んぼには森から湧き出た水が流れ込み、
命のにぎわいがもどった。そして、子ども達の笑い声も。
このお酒には、まだ物語がつづく。

NEC with アサザ基金



IT、で、エコ
www.it-eco.net